

ビデオ制作を通して見えたグループ活動とその成果

関口 美緒

要 旨

「プロジェクトワーク日本語」は日本文化・生活などをテーマにビデオ制作を通して日本語の自然習得を目的とする授業である。このコースでは多国籍の学生が、グループ活動を行い、プロジェクトを完成させる。本稿は、クラス内でのディスカッションの様子・口頭報告および授業の最終レポート・最終発表当日の感想を基にし、講師の所見を交えて報告する。報告に加え、プロジェクト完成までの授業の流れを紹介する。また、日本文化体験の成果についても学生の口頭報告や講師に所見を加え、報告する。

【キーワード】 異文化コミュニケーション ビデオ制作 グループ活動

In-class Group Activities Leading to Video Production

SEKIGUCHI Mio

【Abstract】 “Project Work Japanese” is a class where international students acquire Japanese in a natural manner through the process of producing videos with themes such as Japanese culture and student life in Japan. This report is based on data from class discussions, oral reports, final reports and an impression report on the day of the final presentation. In addition, this report describes the process of video production and also reports on the merits of Japanese cultural experience activities as seen through students’ oral comments and the instructor's remarks.

【Keywords】 Cross-cultural communication, Video production, Group Activity

1. はじめに

「プロジェクトワーク日本語」は総合日本語科目に属し、短期留学生在が対象である。授業は、金曜5限に行われ、15週15コマのプログラムである。多国籍にわたる学生がディスカッションをし、創作活動をする。本稿は、授業での様子やレポートを基に学生主体によるグループ活動で生じた問題点、最終発表後の感想を報告する。プロジェクト完成までの流れや日本文化体験活動の意義についても所見を加える。

2. プロジェクトワーク日本語の特徴

この授業の目的は、日本文化およびクラスメイトの異文化に触れながら、学生生活や日本文化に関するショートビデオ制作することである。そのタスクを通して、学習した日本語を実践的に使用し(関口2016)、また日本語の自然習得の場を提供する。学生はあらかじめ与えられたタスクをこなすのではなく、話し合いの中で、自主的に課題を見つけ、計画し、遂行する。ビデオに加えなければならない要素は、「日本文化に触れること」と「ビデオの中で日本語を使うこと」である。しかし、「日本語を使う」という設定がなくとも、学生たちはビデオ制作活動の過程で「日本語を使わざるを得ない」環境となる。例えば、日本人への出演や撮影の交渉、日本語でのインタビュー、日本語の字幕など日本語を使用する場面が多い。12か国の学生の「異文化コミュニケーション」の場として、「表現・解釈・交渉の連続過程(サヴァニョン2009)」を行いつつ、ビデオ制作というタスクを遂行する。

このクラスの特徴は、学生が自ら取り組むことである。講師は「直接的(direct)指導」を行うのではなく、「緩和的(softened)・間接的(indirect)に提案・アドバイス」を行う(コーエン2015)。このクラスは初日のオリエンテーションでクラスの運営について伝え、学生に自主的にプロジェクトをおこなう意志があることの合意を得る。このような学生の創作活動には、「正しい答え」はない。ディスカッションを通してお互いを理解し、「折衝・妥協し、共感して(サヴァニョン2009)」歩み寄る必要がある。参加学生の国籍は12か国にもなり、価値観の違う「異文化のコミュニケーション」の場ともなる。

したがって講師の役割は、学生に創作活動の場とアイデアを与えること、そしてグループ活動がうまくいくように「間接的に助言すること」である。そのために、基本軸となる学期中のスケジュールを管理し、節目としてディスカッションと発表の場を与え、プロジェクト完成までに導く。またこのクラスの登録学生は短期(1年未満)プログラムであるため、日本の文化に触れる機会を積極的に与える。また、日本語サイトでの検索や日本人との交渉などは留学生にとって困難な場合があるため、講師は学生の情報検索などを補助する。

3. プロジェクトワーク日本語の過去の作品

「プロジェクトワーク日本語」は、学生のニーズに対応して、毎学期微調整を重ね、最終目標であるビデオ制作までを行う。最終目標は、留学生の視点・立場で見た日本の生活や文化を未来に来日する留学生にメッセージとして伝えるためのビデオを制作することである。すべてのビデオは、プロジェクトワーク日本語の学生だけでなく、この授業に関わった様々なボランティアの方々、例えば、様々な場の提供者、日本語の字幕などの協力者や出演者も確認することができる。表はこれまでに制作したビデオのリストである。

表1 プロジェクトワーク日本語の過去の作品一覧

	ビデオ	出身国	計
2015年 春学期	筑波大学キャンパス紹介ビデオ (スチューデントcommons・学食・ジム・ 筑波大学周辺等)	ブラジル (5)・アメリカ (2)・ 韓国	8名
2015年 秋学期	筑波大学学生生活フォトブック (学内・つくば駅周辺・筑波山・茶懐石・ 東京：秋葉原等)	スペイン・ロシア・香港・アメ リカ・フランス・ドイツ・イン ドネシア	7名
2016年 春学期	東京紹介ビデオ (皇居・丸の内、新宿・ 都庁・戦争記念館・ゴールデン街・花 園神社・祭り等)	ロシア (3)・ブラジル (2)・9名 ラトビア・スロベニア・イギリ ス・台湾	
2016年 秋学期	日本の食：食のマナー・カレーの作り 方など、学園祭の食レポ・茶道教室	フランス (2)・イギリス (2)・7名 アメリカ・香港・ジョージア	

注：出身国 () の数字は、複数参加の人数を示す。以下表2・3も同様。

4. 2017年春学期の学生の内訳

春学期は11か国から19人の学生 (うち1名は特別聴講生) が登録し、6月にメキシコ人の日本語の講師も学生として3回参加した。したがって、合計12か国の学生20人が参加した。

表2 プロジェクトワーク日本語の過去の作品一覧

	内訳	計
ロシア・東欧圏	ロシア (6)・カザフスタン (3)・アゼルバイジャン (1)・タ ジキスタン (1)・アルメニア (1)・ポーランド (1)	13名
東・東南アジア圏	タイ (2)・ベトナム (1)・インドネシア (1)・韓国 (1)	5名
北アフリカ	モロッコ (1)	1名
北アメリカ	メキシコ1 (1)	1名

5. 授業の流れ

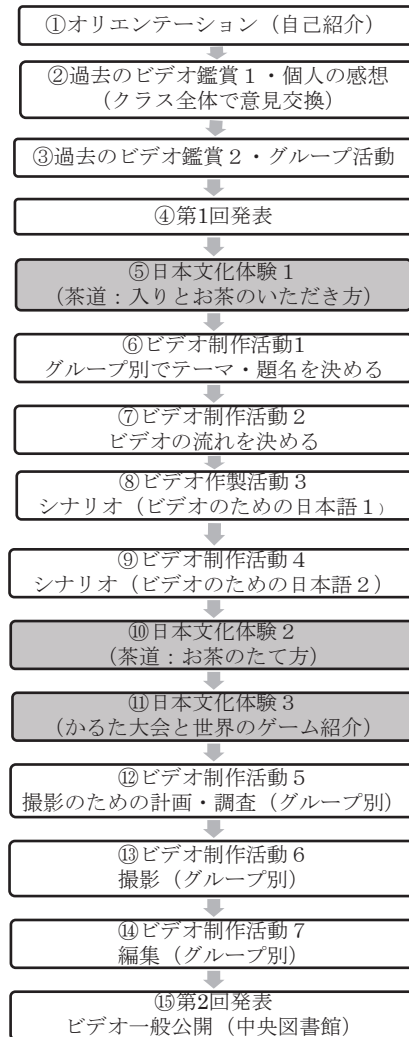


図1 春学期のスケジュール

図1 (①から⑮は図中の数字) では、春学期の15週の授業の週別の番号である。本節では、主に「ビデオ制作活動」に関連する活動の流れを詳しく述べる。また図1中、ビデオ制作活動とは直接関わりのない「日本文化体験」は、グレーの枠で記載した。

まず初日の自己紹介 (①) では基本的な部分を日本語で行った。個人の経験や国の文化・背景などを質問する時は、日本語と英語を使って行った。自己紹介では日本文化について特に興味や疑問があることを話してもらった。自己紹介は、最終目標となるビデオ制作のためのグループ作りの参考になるように行った。② (1週目のオリエンテーショ

ン後) および③(2週目)では過去に行ったプロジェクトワーク日本語のビデオとG30映画祭に出品したショートフィルム(関口2016)の鑑賞を行った。②は個人的な感想、③ではペアやグループで感想を話し合った。過去のビデオ・フィルムはパターン・課題が多様であるため、様々なビデオ作りのイメージを膨らませることができる。4週目はグループごとにプレゼンテーションの準備活動のためのディスカッションを行ない、後半で第1回発表(④)を行ない、ビデオのグループごとにテーマと方法について大まかな内容を発表してもらった。第1回のプレゼンテーション後、3名の学生が自らのイメージと異なることが明確になり、グループ移動が見られた。グループが確定したところで、6週目以降は、それぞれのグループに分かれて、ビデオ制作活動(⑥)を進めた。8週目と9週目にわたり、シナリオ作成を行った。シナリオのための日本語表現については、2週目と3週目の過去のビデオ鑑賞の際も講義したが、シナリオ作成ではより具体的なアドバイスを与えた。12週から14週は、グループ別に活動した。グループAとBは主に学内であったため、協力者(日本人学生)やシナリオの都合に合わせて、クラス以外の時間で撮影することも多かった。講師はグループAのビデオ撮影にも出演しており、学生と経験を分かち合った。グループCは学外撮影(日本家屋・ショッピングモール・剣道大会等)もあった。そのためクラスでは、撮影先について講師にアドバイスを求めることも多かった。最後にビデオの発表(⑤)を行った。制作したビデオは、筑波大学中央図書館チャットフレームCで一般公開された。

本コースは3回にわたり、日本文化活動を行っている。主軸となるビデオ制作以外に、5週目(茶道教室1回目)、10週目(茶道教室2回目)、11週目(かるた大会)に日本文化活動を学生会館内の和室で行った。それらの活動の経験は、ビデオを制作する上で日本文化の基本的な理解につながると思われる。さらに、2回に渡って行われた茶道教室では、茶道の講師と4名の門下生の方々(日本人)が教授された。そのため、学生たちは日本語での会話や挨拶を行なった。また、同じ空間で一緒に日本文化を経験することにより、普段コミュニケーションを取らない学生同士が会話をする機会も生まれた。文化体験は、日本語文化の理解、会話の自然習得の場となった。そして和室という正方形の空間に座を取り、お互いが面と向かうことにより、新たなコミュニケーションを広げる場となった。

6. グループ間のコミュニケーション

6.1 今学期の傾向

本コースでは、ビデオ制作というタスクを与えることにより、ディスカッションの場が多く持たれている。過去の事例にもみられるが、個人で参加する学生もいる一方、同じ国の出身者が初めからグループで参加する傾向が強くみられる。今まで、複数人で参

加した学生たちは、すでにこの授業参加前からの知り合いであった。また、他の授業で一緒だった学生同士が誘い合って参加している場合も多い。

今学期は、20名（ゲスト1名を含む）であったため、グループに分けてビデオを制作することにした。問題はグループ分けにあった。やはりグループ決定に時間を費やす場面が多かった。講師はテーマによってグループを決めるようにと促した。つまりもともと友達だからとか同じ国だからという理由で決めないようにとアドバイスをした。しかし、それ以上学生をコントロールは行わなかった。あくまでも学生の意志でタスクを進めた。

しかし、結局同じ国の出身者同士で隣同士に座ってしまう傾向にあった。やはり、不安からかトピックより居心地の良さを選択する傾向が見られた。

表3 グループ別出身国

第1回発表（表3-1）

グループ名	出身国と人数	計
グループA①	ロシア (2)・カザフスタン (2)・アルメニア	5名
グループB①	アゼルバイジャン・インドネシア・韓国	3名
グループC①	ロシア (2)・カザフスタン (2)・タイ (2)・タジキスタン・ポーランド・ベトナム・モロッコ	10名

第2回発表（ビデオグループ）（表3-2）

グループ名	出身国・人数	計
グループA②	ロシア (4)・カザフスタン (2)・アルメニア	7名
グループB②	アゼルバイジャン・タジキスタン・インドネシア・韓国・メキシコ	5名
グループC②	ロシア (2)・カザフスタン (1)・ポーランド・タイ (2)・ベトナム、モロッコ	8名

6.2 レポートと口頭報告

学期中4本のレポートを義務付けた。1本目は、ビデオ制作のテーマを個人またはグループメンバーで考えたもの、2, 3本目は、学期内に行った文化体験活動（茶道教室とかるた大会）についてである。4本目は最終レポートとなり、日本文化またはビデオ制作活動の感想を書いてもらった。

本稿では、4番目の最終レポート（提出義務あり）、最終発表後の感想（任意提出）の結果、そして口頭での報告から主だった意見を選択した。特に、ビデオ制作に関連した感想や意見を中心に記述した。

レポートは挨拶や簡単な表現を除き、ほとんどが英文で提出された。以下、英文で提出されたレポートは、筆者が日本語訳し、要点をまとめた。また、数件の最終レポートは日本文化への感想や具体性に欠けた内容であったこともあり、提出件数とは必ずしも合致していない。出身国の後の A/B/C はグループ、アルファベットの後の番号は、個人を表わす。また、報告・レポートの時系列に沿って表 4-1 と 4-2 にまとめる。a は最終レポート、b は最終発表後の感想レポート、c は口頭報告からの引用であることを示す。レポート形式のため、複数回答である。国の表記は R: ロシア、KA: カザフスタン、T: タイ、I: インドネシア、KR: 韓国、V: ベトナム、AZ: アゼルバイジャン、TZ: タジキスタン、MX: メキシコとする。灰色の部分是否定的な感想、無色の部分は肯定的な感想を表わす。

表 4-1 学生の感想（最終のビデオ発表前）

意見や感想	資料	回答の学生	計(件)
グループワーク自体のストレス	a	R-A1/C1/K-A1、	3
個人の意見が反映されなかった	a/c	(a):R-C1/T-C1/	
(c):I-B1	3	10 名	
男性だったことでリーダーにされてしまった	a/c	(a):T-C1/ (c):KR-B1	2
多文化間でお互い分かり合えなかった	a	T-C1	1
このクラスの明確なゴールの設定がなかった具体的な指示が欲しかった	a	R-A1	1
コミュニケーションの問題で何度もやり直しをした場面もあった	a	R-A2	1
多文化での出会い・体験がよかった	a/c	(a):T-C2/ (c):I-B1/KR-B1, T-B1/ AZ-B1/MX-B1	6
多言語でのコミュニケーションがよかった	a	T-C2	1
ビデオ制作の技術を得たことがよかった	a	R-C1	1
よくやり遂げた・ベストをつくした	a	R-A2/T-C2/V-C1	3

サンプル数 $n(a+c)=11$ 件 (内訳 a:6 件、c:5 件)

表4-2 学生の感想（最終のビデオ発表後）

グループワークのストレス・孤立感があった	b	K-A1	1
話し合いで理解できないロシア語を使われ、ストレスだった	c	I-B1/KR-B1	2
とても大変な作業だった・やり遂げた	b/c	(b)R-A1/A2/A3/A4/ T-C1/R-C1/R-C2, (c)I-B1	8
自分のグループメンバーへの尊敬	b	R-A1/A2/A4/C1	4
他のグループ（クラスメイト）への尊敬	b	R-A3/KA-C1/R-C2	3
クラスの自由さが好き	b	I-B1	1
ビデオのイベントが好き・勉強になった	b	KA-A1/I-B1	2
多文化での出会い・アイデアがよかった	b	KA-A1	1
ビデオの日本人学生たちが興味深い	b	R-A4	1
日本的なコミュニケーションの面白さ	b	R-C2	1
グループワークでの楽しさ	b	R-A2	1
メキシコのゲストの参加で地域が広がり、文化比較がビデオに反映できた	c	I-B1/KR-B1/AZ-B1/TZ-B1	4
メキシコのゲストの参加で日本語（共通言語）での話し合いができた	c	I-B1/ KR-B1	2

サンプル数 $n(b+c)=14$ 件（内訳 b：9 件、c：5 件）

最終レポート（表4-1）と最終発表後の感想（表4-2）を比較する。最終レポートと最終発表後の感想の共通点は、「充実感があった。」という感想が多かったことである。

否定的な感想の多くは、最終レポート（最終発表前に提出）で挙げられている。特に、グループ内、グループ間で生じた問題点やグループ活動としてのクラスが好きではないという意見である。グループ活動では、リーダーの選出方法や個人の意見が反映されにくいことなどの不満も出ていた。

最終発表後の感想（任意提出、自由記名）では、提出した学生の多く（9件中6件）が「大変な作業だった。(2)」と記載している。グループBの感想(b)とグループBの口頭報告(c)およびグループCの感想(b)からより具体的にビデオ制作の作業の大変さが見て取れた。作業は長時間で時に夜遅くまでかかったと述べている。最終レポート(a)では否定的な感想も多かったが、ビデオ鑑賞後(b)は肯定的な感想に転じる傾向が見られた。

6.3 グループ編成の経緯と各活動の観察（講師の所見）

講師は、15週間という短い期間にそれぞれ異なった文化背景を持つ学生たちがグループ活動を通して、1つのプロジェクトを完成させるまでを見守った。以下、講師の観察と所見を述べる。

クラス活動の序盤は、初日に自己紹介はしたものの、同じ国の学生だけで集まり、自分たちの言語でひそひそ話をしている様子が多かった。そして、当初はクラスを2つのグループに分ける案が優位だった。しかし、グループAはロシア語圏（ロシア、アゼルバイジャン・カザフスタン）が優位となり、ロシア語がわからない学生たち（インドネシア・韓国）が孤立してしまった。その後、講師の勧めもあり、グループは3つに分かれた。その後、グループAはロシア語でコミュニケーションをとっていた。しかし、講師にはビデオ制作のテーマや計画・方法などを主に日本語（時に英語）で説明した。グループBは、英語と日本語を使ってコミュニケーションをとっていた。詳細な話し合いは英語で行っていたが、できるだけ日本語を使って、コミュニケーションをとっていた様子であった。グループCには様々な地域からの学生が参加し、日本語レベルも様々だった。さらに8人という大所帯だったため、英語でコミュニケーションをとることが多かった。グループCはさらに細かいグループに分かれ、グループによっては、できるだけ日本語を使おうという様子も見られた。A・B・Cすべてのグループに日本語5以上の学生がいたため、シナリオも字幕も講師を頼らずに、各グループ内で行なった。

また、文化体験活動など共同作業を行うことで、心が打ち解けていく様子が見えかけた。特にベトナムやモロッコなどクラスメイトに同じ国の出身者がいなかった学生たちにとって、学生同士の距離が近くなっていったようである。それらの学生たちは、その後の活動で以前より他のクラスメイトと会話する場面が増えていた。

最終発表では学生全員が中央図書館チャットフレームのビッグスクリーンでビデオを鑑賞した。学生たちは、ハグをしたり、肩を抱き合ったりして、グループメンバーと充実感を分かち合っている姿が多く見受けられた。他のグループのビデオにもうなずきやため息、スクリーンへの指差しなど顕著な反応を見せていた。

6. まとめ

ビデオ制作というプロジェクトを完成させるまでの過程をグループ活動に焦点をあてて、観察してきた。分析は、最終レポート（最終発表前に提出）と完成ビデオ発表後の感想、口頭報告、そして授業での講師の所見を交えて行った。その結果、ビデオ発表に至るまでの過程では、衝突や不満があり、ビデオ制作も大変な労力であったことも分かった。しかし、ビデオ発表後は、自分のグループだけでなく、他のグループも称賛し、充実感があつたと述べる学生も多かった。また、日本文化体験を通して、文化の理解に役立っただけでなく、日本語会話の場となり、さらにクラスメイトとのコミュニケーションを広げる場になった。グループ活動は様々な不満や問題もあったが、最終発表ではお互いに感謝し、達成感を見せていた。

8. 今後の課題

2017年の春学期は、学生の人数が多く、多国籍で、かつ国籍に偏りがあるという、かなり困難なクラス運営から始まった。先学期までは、自らリーダーになる学生がいたが、今学期はリーダーをたてることが困難であった。今後、リーダーの資質のある学生や自主的に活動する学生がいない場合、講師はどう進めるか。また出身国や地域に大きな偏りがあり、意見の相違や衝突が起こった時 (McLemore and Romo 2005) に、講師はどの程度介入するかが問題になってくると思う。

このように学生主体によるクラスを運営する場合、様々な葛藤が生じるのは当然であり、こういった問題を乗り越えることで学生の成長が期待される。また、「プロジェクト達成をグループ目標にし、タスクをこなしていくことで自然な言語獲得にも結び付き (コーエン 2015)」、座学とは異なった自主的な方法で言語習得が可能であると思われる。「プロジェクトワーク日本語」で学んだ学生たちは、実際に多文化・日本文化を実際に体験しながら、プロジェクトを達成してきた。今後も多国籍の学生間グループ活動で起こりうるコミュニケーションの問題点に事前に目を向け、次回のクラス運営に生かしたい。

謝辞

茶道教室では、裏千家の中島宗春氏と門下生の方々にご教授いただいた。またビデオ制作や本稿にご意見を寄せてくださった方々に感謝の意を表したい。

注

1. メキシコ人の日本語講師 (スラヤ工科大学) はゲストとして、5、6、7週目に出席し、茶道教室と2回のビデオ制作に参加。
2. 「hard work/worked very hard」「tough work」「spent a lot of time」など作業が大変だったことを表現する説明した感想

参考文献

- コーエン・アンドリュー (2015) 『多文化理解の語学教育—語用論的指導への招待—』
石原紀子編著 研究社
- サヴァニョン・サンドラ (2009) 『コミュニケーション能力—理論と実践—』 草野清子
訳 法政大学出版局
- 関口美緒 (2016) 研究報告「基本文法の教室内学習と実践的言語運用について—学習者
作製映画における既習・未習文法分析—」『筑波大学グローバルコミュニケーション
教育センター日本語教育論集』31号: 159 - 171
- McLemore, Dale and Romo, Harriett (2005) 'Racial and Ethnic Relations in America-

seventh edition' Pearson Education, Inc.

参考サイト

The World from the Other Side (グループ A)

<https://youtube/jqrKZpThdqA>

Nihon OK, Gaikoku Dame (グループ B)

https://www.youtube.com/watch?v=mffMG__Ve1k&t=23s

Japan Behind the Doors (グループ C)

<https://www.youtube.com/watch?v=EszTH4YPovM&t=13s>